

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 佐藤有希子

本論文は、古代インドの四天王に淵源をもつ毘沙門天の造形と信仰が、中央アジアを経由し中国、朝鮮半島、日本へと伝播した過程と、平安時代の日本における受容を考察したものである。

第1部では、日本における毘沙門天の造形の展開を追った。9世紀の唐で制作され、現在は東寺に安置される兜跋毘沙門天像について、近年の議論を批判的に検討したうえで、空海が請来したものと推定し、当初は平安京の羅城門に安置されていたとする説を補強した。また、東寺像を11世紀前半に模刻した清凉寺像については、奄然が10世紀末に請来した清凉寺本尊の釈迦如来像および像内に納入された舍利を守護する存在と位置づけた。そして同像は、奄然のパトロンであった藤原実資の毘沙門天信仰を反映したものであること、平安京の西北に位置して王城鎮護の役割を果たしていたことを明らかにした。東寺像・清凉寺像は、平安時代の貴族社会における毘沙門天信仰とその造形において主流を形成する遺例であり、これらの制作環境や背景を明確にしたことは、本論文の大きな貢献と評価できる。さらに、善水寺像をはじめとする天台系の諸像にも広く目配りをし、古代日本における毘沙門天の造像を総合的に把握することを試みている。

第2部では、中央アジアから東アジアにかけての毘沙門天信仰の広がりについて、作品調査を通じて大きな見取り図を描き出している。ホータン（中国新疆ウイグル自治区）のダマゴウ遺跡で近年出土した7世紀の壁画に兜跋毘沙門天の原形があることを指摘し、その信仰が同地を経由して展開したとする古典学説に再び光を当てた。南京・長干寺舍利塔から出土した11世紀初頭の阿育王塔には、毘沙門天像と通肩の釈迦如来立像（清凉寺式）との組み合わせが見られることから、北宋の作例と平安時代の清凉寺像との間に共通する意味があったと推定する。

本論文はアジアと日本を広く視野に入れ、7世紀から12世紀という長期間を対象としており、きわめて雄大なスケールを示す反面で、個別作品の取り上げ方の軽重に差があって部分的に散漫な記述となっていたり、仏像の制作背景に関する歴史叙述に曖昧な点が散見されたりと、修正すべき点も少なくない。しかしながら、中国各地に点在する関連作品の現地調査を重ねて実証的な研究姿勢を貫き、中国における最新の発掘成果を反映させ、さらに、近年大きく注目されている舍利信仰と造形の関係にも踏み込んだ本論文は、毘沙門天像に関する総合的な研究として高い学術的価値を有している。よって、審査委員会は博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。